

# 眞生

第十卷 第五號

□私の知人の話に或る富豪の傾きかけてゐた一家があつた。然に四五年前から入りこんで来た一人の能率研究家の爲めに、今や其の家は全く回復して、近年にない不景氣を取り返し、更に年額何十萬圓の純益を擧げつゝあると。

□之は主として能率研究家の言ふところに従つて、事業の改廢、組織の變更、其の他の一家の整理までも改善した結果によると。一例を擧ぐれば自家自動車のゴム輪を一定量の使用の後、之を前後に取りかへ、更に左右に取り換へることによつて、年額優に一萬圓からの經費節減ができてゐる如きそれである。

□其の他、材木運搬に使用する汽船を常に遊ばせぬやうに使用したが如き、或は一度使つた古繩を更に再び使用するやうにした如き、或は同じ處に使ふ電燈も其の場所によつて燭光を増減したが如き、單にそれ丈でも何百萬圓からの身代としては大きな節約である。

□此の外に、事業の改廢、事務の組織化、人物配置の適任適處、全体一致の積極的行動に至つては更に活目して見るべきものがあるに違ひない。而もかくしてこそ本當の事業家であると云はねばならぬ。乍然人生の人生一生の生活も亦之と同じである。

□然に今時の人にして、眞に幾人か此の人生の能率を考へてゐる人があらうか、たゞ徒に金錢の奴隸として一生をその爲めにのみさゝぐる人が多いではないか。私共は更に一步を進めて、人生の一生を價値の實現にまで能率化すべきであらう。（念）

# 生かされる中心

## 目次

一人——一点!	尅
生かされる中心	尅
来るべき浄土教	土屋觀道
救いの宗教	土屋觀道
吾朋便り	

## 一人——一点!

自分が一人更ればいゝ。  
自分が一人でいゝから、良い方へ變ればいゝ、すれば皆も、屹度いゝ方へ變つて呉れます。  
それが、人がよくなればいゝに思つてゐるだけで、自分がよくならうとはせぬ。  
皆が一緒によくなれば、それに越した事はないが  
そんなことは出来そうもないから  
先づ、自分が一人。  
たつた一人でいゝから、自分が先づ、よくなりた  
すれば、屹度、総てが動きます、  
凡ては一人から初まる——。  
その「一人」になるのには  
自分の中に、たつた一つでいゝから  
「自分の悪い」點を見出しやいゝ、  
本當に、自分が悪かつたと思ふ點が、氣が付けばいゝ、  
「此の一點」から、自分が變化し初めます。  
舊い因習の間から目醒めて、  
新しい光明の天地へ展開し初めます。  
そして総てが改まり、  
力と、意氣と、望みに充たされて、  
新生の世界へ旅立ちます。  
此の輝ける、悦びの生に、活ける者が、何人ある——。(尅)

話はいくら聞いても、結局、話しです。

説明はいくらしても、結局、説明です。

信仰そのもの、生命そのものを得るがためには、「大自然」の中へ、ドボン! と飛び込まねばいけません、そして「大自然」の懐中の中へ、ズブズブ漬つてみると、初めて宇宙の大生命によつて、自分が生かされてゐたといふことがよくわかつて來ました。そしてその素晴らしい力で、永遠に無限に活かされて行くんだといふことも確りわかつて來ました。

自分は單一な個体であつて、飯や酒を喰つて生きて行くんだと思つてゐたが、實は、それ以上の大きな力が、底の方から自分を眞直ぐに活かそうとしてゐて呉れたから、生きて來れたのです。

自分は自分だけの力で生きてゐたのでなく、自分以上の、全宇宙の力が、悉く私一身の上へ集つて、私を高く正しく強く活かそうとしてゐて呉れたのです。何といふ莊嚴な、嚴肅な、私達の人生でせう。

此の「生かされる中心」が、わからなくて、少々の修養をしたり、金儲けをしたとて、それが何の役に立つてせう。子供が河原で、小石を積んで遊んでゐるようなものです。

金を得たり、學位を得たくらひで、人と競走で勝つたと喜んでゐるが、他人に勝つた位いが、何の誇りになるのでせう。我々の生きてゐる人生全体が、腐り物にならうとしてゐます。

正しく「人生の迷妄」に勝つて、勇らしくピンと立ち上がらねば駄目である。(尅子)



# 來るべき浄土教

土屋 觀道

## 一、各宗各派のできたわけ

來るべき浄土教がいかなるものであるかを知るには先づ各宗各派がどうして出來たかを知るの必要がある。そして各宗各派がどうして出來たかを知るには其の宗教の起原と佛教の起原とがいかなるものかを知る必要がある。

### 一、宗教の起原と佛教

此の二つの關係を歴史的に見れば宗教の起原が佛教の起原より以前であつたことは云ふまでもない。乍然宗教の起原が人類の起原より前へだつたと云へないことも許よりである。然ば宗教の起原は人類の起原よりも後であつたか、それとも同じであつたか。若も人類の發生が宗教的要求を充たさんが爲めに此の世に現はれたとするならばそれもさう云はれないこともなからうが、若し宗教的要求が人類の發生後或る時代に於て現はれたものとするならばそれはいかなる要求のもとに現はれたものであらうか。此の問題が即ち宗教發生の起原である。それと同時に各宗各派の成立と云ふものが一時にできたものでなくして、そこには必ず社會の一つの事狀のものに現はれたと云ふことを知るに至つて、佛教の發生も必ずしも亦それ以前の既成宗教と無關係にあるとは云へないものがある。此の意味に於て當時の佛教が從來の宗教に對していかなる態度をとつたかと云ふことは

佛教の起原に對する研究としては實に重要な一つの題目である。そしてまた佛教が一種の宗教であること云ふ限り、其の宗教がいかなるものかと云ふこと、それが宗教の本質としての宗教の起原と無關係にあるべきでないこと云ふことも亦許よりであること云はねばならぬ。

然ば宗教の起原はどこにあるか、そしてまた宗教とはいかなるものを云ふのであらうか。西洋の學者は「神と人との關係が宗教である」と云ふものもあるが神とはいかなるものを神と云ふかと判明しない限り、キリスト教で云ふやうな神を否定する佛教の如き無神論では佛教は宗教でないこと云ふことになるが、佛教も亦宗教と云ふ限り必ずしも神と人との關係をのみ以つて宗教と云ふことはできないであらう。従つて宗教は有神と無神とを以つて論ずべきものでない。

然ば宗教を以つて有神無神以外に於て之を定義するものは何であらうか。私は之を人間の要求の中に求むべきであると思ふ。即ちキリスト教に依り、或は佛教に依ると云ふことはそれによつて私共が何を得やうとするかにあること云はねばならぬ。其の他色々の宗教と云ふ宗教に於て多くの人がそれに依らうとすると云ふことはそれによつて何にかを求めやうとするものがあること云はねばならぬ。而して、宗教は要するにそれを得んが爲めであること云ふべきであらう。従つて多くの宗教が此の世に現はれると云ふのも、亦此の世に現はれなくなると云ふのも、それは要するにそれによつて其の當時の人の宗教的要求を充たし得るかどうかによつて之を見るべきである。

然ば其の宗教的要求とは何であらうか、それは一言にして云へば永生と向上である。中でも生を求めて得られず、向上を求めて得られぬこと云ふところに、更にそれを得んとする絶對の境地を求むるところにあるやうだ。尤も永生と向上と云ふものだけならば永生は哲學に向上は道德に之を求むることのできるではないかと云ふことも云へないではないが釋尊の佛教は一面から云へば全くそれだとも云へないことはない。然し佛教が人生の無常を感じ、社會生活の無意義を觀して、其の苦から脱脚し

たところに本當の人生を見やうとしたことだけは事實であらう。

そしてまた、佛教が釋尊によつて新に起つて來たのもこの二つの要求が從來の宗教によつて充たすことができなかったところから來たものであることも明かである。否、單に佛教ばかりでなく多くの宗教が此の世に新に生れて來ることは此の從來の宗教が其の當時の人の此の要求を充分に満足せしめることができなかった時にあることはもとよりであるが、各宗各派の分列の起つて來るのも亦此の道理を外にしてあるものではない。

従つて各宗各派の内容は恰も其の當時に於ける人々の永生と向上とを充たさんとする思想信仰の反映である云つても過言ではない。

二、佛教の起原 然ば佛教の起原がどこにあるかを知るには當時の宗教に對する釋尊の態度を見れば佛教が新に主張し出した點と其の從來の宗教に反抗した點とを知ることができる。其の他當時の印度宗教と釋尊の佛教とを比較することによつても之を知ることができるが、當時の印度の宗教は之を修定派と苦行派との二つに大別することができ、其の中で修定派は古來から傳つた印度のバラモンの關係を論ずる轉變説である。而て苦行派は之に反して此の身を苦しむることによつて解脱を得るものとする修業であつて、其の説は此の世界を種々分子の集合からなると云ふ積集説である。之を今日の學説から云へば前者は萬物一元論であり、後者は萬物多元論と云つてもよい。而て此の人生を前者は修定によつて一元に歸らうとし、後者苦行によつて清淨にならうとしてゐるものである。然に釋尊の宗教は此の二者を棄て、修定と苦行の二つをとらず直に智見を開いて宇宙の真相を見、それによつて眞實の生活を開くにあつた。従つて前の修定と苦行との二つに對すれば佛教の立場は主智派と云つてもよい。或は前二者を批判して此の二者を押えて其の中道に立たれたところを見れば之を批判主義

と云つてもよい。即ち一切の萬象は悉く無常のものであつて常住なものはないと云つて天地萬象の常住説をとらず、諸法の無我を見ることによつて、一切皆空と談じ、之を執することは苦なりとして、其の愛慾を捨てるところに眞實の涅槃があるとせられた。そこには何等の哲學的問題を離れて直に實際生活をとつて來たのである。

之を宗教史上に眺むれば釋尊の佛教は從來の印度宗教にあきたらぬ一つの新説であつて、又一宗の新しき宗教運動であるが、其の云ふところ爲すところ、全く從來の宗教と相反することも云ふべく、修定と苦行とを捨て、新に生くべき人生の方向を示したところは正に當時に於ける一種の宗教革命である。

## 一、大乘と小乗

一、上座部と大衆部 然に釋尊の佛教も其の弟子に至つては必ずしも釋尊と同じではない。之は其の説を受くる人々の個性の相異や境遇の違いもあり、又後に至つて社會生活の變遷もあつて、必ずしも同一であり得ない事情もあらう。而も此のことが釋尊の滅後一層著しく現れて來たのは所謂彼の上座部と大衆部との分列である。上座部は主として長老に多く、且つ永く釋尊に接近してゐた人に多いのであるが、釋尊の言行を一家絕對に尊重した結果として、いつまでも釋尊當時のまゝの教團を維持しやうとして、其の形式を守り、大衆部は主として釋尊の精神にもとづいて合理的生活に立たうとしたものである。之は主として青年の人に多く、釋尊にあまり常侍しない人に多いのであるが時代と共に釋尊の精神によつて行ふとする進取派である。

二、小乗教と大乘教 更にそれが後に至つては小乗教と大乘教とに分れて來るのであるが、其の大きな分れ目は自利主義と利他主義との分れ目にあると云つてもよい。前者は主として自己の解脱を

のみ中心としての修行であり、他を顧みるに暇がなく、單に釋尊の言説に捕はれて全く保守的であり戒律主義であるに對し、後者は主として、精神主義であり、進取的であり、理智主義と同時に利他主義である。

尤も此の間には同じ小乗教と云はれるもの、中にも亦各意見を異にするものがあり、又同じ大乘と云はれるもの、中にも亦種々の見解を異にするものがあるのであるが大乗と小乗との分別は主として右の如き共通の相違があることは事實である。而て大乘教の興りは小乗教の行きつまりに對して現はれて來たゞけに大乘教は小乗教を批判しそれを取捨して自己の主義と主張とを強く言張つて來た感がある。

**三、大乘教の發展** 中でも大乘教の發展は非常なものであつて、それには又權大乘、實大乘等の言葉もあつて、各その説を異にするものもあるが同じ大乘教の發展にも其の説前後優劣の感があるものが甚だ多い。而して、それらの大乘教も決して一時に現はれたものでなく、又一時發達したものでない。

乍然若し此の間に於て宗教の革命と云ふものがあるとするならば小乗對大乘の一大展開の上之を見るべきであつて、小乗そのもの、分別、若くは大乘そのもの、分派と云ふ上には之を見ることができないやうである。乍然たゞ一つに一つの特例を設けることを許すならば聖道門に對する淨土門の出現は正に全佛教を通じての一大宗教の變革と云つてよい。何となれば今までの佛教の一切に對して特に淨土門の一大宣言が宗教革命としての重大なる展開を持つてゐるからである。

### 三、聖道門と淨土門

#### 一、聖道門と淨土門

然ばどうして大乘佛教の中から淨土教は出て來たか。淨土教に對して從來

の佛教は悉く聖道門と云はれてゐる。而して淨土宗を開いた法然上人は聖道淨土の二門を立つる所以は聖道門を捨て、淨土門に歸せんが爲めであると云つてゐられる點から見ると、上人にとつては實に從來の宗教に對する一大革命と云つてよいのである。

**二、淨土教の成立** 然ば淨土教の成立はどこに其の要點があるかと云ふに、難行と易行との相違にあると思ふ。或は自力と他力にあると云つてもよい。或る人は聖道門と淨土門との相違點は此土入聖と彼土往生とにあると云ふ人もあるが、それは聖淨二門の優劣問題ではなく、又淨土教成立の中心點ではない。若し此土入聖と彼土往生とは何れがよいかと云へば若し吾々の機根が許すことならば此土入聖が彼土往生よりもよいと云ふことはもとよりである。それにもかゝらず此土入聖を捨て、彼土往生を願ふと云ふことはそれは凡夫の身としては其の機根が悪くして此土入聖に堪えないからである。従つて淨土教の成立が優れたものを捨て、劣つたものをとると云ふところはないことは云ふまでもない。それにもかゝらず然ば淨土教が何故に聖道門よりも劣つた淨土門をとるに至つたかと云へば聖道門は之を修するに難しくして到底今時の凡夫の入り得ないところであるに反し、淨土門はいかなる劣機の人をも入ることのできる易行道であるからである。

此の意味に於て從來の佛教は殆ど悉く自力難行の聖道門であつて、一人としてその道によつて解脱する事ができなかつたに對し、此の佛教の行詰りを打破して一切の衆生を救ふべく現はれて來たのが即ち淨土教であつた。之を上人から云へば一宗の建立となるが佛教そのもの、行詰りを展開したと云ふ點から云へば從來の行き方と全々違つた立場から此の佛教を宣傳した事は全く宗教の革命である。其の主なる點は佛教の最後の目的は同じであるが、戒定慧の三學を修して初めて解脱を得べしと信せられた佛教をそれによらずとも念佛申すことによつて佛の淨土に往生ができ、其處で直に佛となれるといふことは一には三學難行に行詰つて惱んで居るものや、自己の罪惡で成佛斷念の絶望に陥つて

ある民衆をして、自己も亦佛となれるとの望みと喜びと力とに復活せしめたのであつた。而も如來の淨土にすべてが往生ができること云ふことは一面如來の大悲に浴するの安らぎと如來を中心とする道友親近の睦みとは全く人間としての社會的平和を持來したことは實に絶大なる恵みと云はねばならぬ。尤も淨土教が此の世に行はれるに至つたのは非常に古いことではあるが、最も完全に現はれたのは我國に於ける法然上人によつてであつて、それ以前の淨土教は上人に到るまでの前提に過ぎぬ感がある。従つて眞に淨土宗と云ふ立場から見れば完成せられたる淨土教は我が法然上人の淨土宗と云はねばならぬ。

### 三、法然上人の淨土宗

けれども上人の淨土宗はまだ聖道門對淨土門の對立の方面が強く現はれてゐるのであつて、從來の宗教に對しては實に一大革命の感があるが、それだけ單に淨土教と云ふものから之を見れば尙幾分の判然せぬものも全々ないとは云へないものがある。此の點が一面上人が單なる一宗一派の祖師として立つよりも更に聖道門に對する淨土門の教として大きく立たれた人として見らるべきの地位にあるのであつて、又上人の偉大なる處でもあるが、又それだけ其の後の淨土教が對內的には幾多の分派が對立し又派出する所以でもある。

然し聖淨二門の對立は聖道門が先きであり、淨土門が之に對立して興つて來たのであるが、それにそれだけの聖道門に對してあきたらぬものがあつたからと云はねばならぬ。而て其の點はどこにあるかと云へば聖道門の修行が或は觀法となり、或は禪定となり、或は戒律主義なり、或は苦行を以つて樂しむと云ふ形になり、それが民衆一般の佛道を妨げ、人類生活の向上と永生との望みをさへ押へるに至つたのであつた。而もそれを念佛の一行によつて彼土往生に展開したのが淨土教である。此の意味に於て淨土教が聖道門の三學を捨て、觀法と禪定と戒律とを無視して念佛の一行に立つたのである。而て、之は又釋尊が當時の修定主義と苦行主義とを捨てられた心もちと相通するものがあるかに見ゆる。

## 四、淨土教の分列並に發展

### 一、淨土宗と眞宗

然に同じ淨土教でも之を上人以後に立つて見れば自づと幾つかの淨土教に分れてゐる。中でも淨土宗と眞宗との對立の如き其の最も甚しいものである。之は鎮西上人と親鸞上人との個性の相違もあらうが、何れも上人の跡を繼ぐものだと思ひ乍ら、そこに自然と相違するものが見はれてゐる。而も其の中で鎮西の方は法然上人の説に近く、又聖道門的形式を念佛行の上に置かうとし、親鸞の方ではそれらの一切をすて、信の一念の上に他力の救済を仰がうとしてゐる感がある。

之は鎮西が上人に師仕せられた時代が丁度上人の選擇集選述の前後であるだけに上人の生活は主として宗乘學的立場に立つて聖道門に對して淨土門建立の氣分が多かつた爲めに、その氣分がやはり其の御弟子の鎮西上人の上に傳つたものではあるまいか。そして鎮西の御生活も一生獨身であり、正僧としての生活であり、念佛も常に別時會を行じてゐられた關係上その説かれるところも自ら願行の念佛を衆生の上に置かれたわけであらうと思ふ。之に對して親鸞の生活は已に肉食妻帯の身となられ、上人晩年の弟子として在られただけに其の信仰も亦念佛獨自の境地がないとは云へない。云かへれば聖道門な型を破つて信仰本位の淨土教が顯はれてゐるものがある。其の點から云へば從來の淨土宗が法然上人としては聖道門に對したのに、眞宗では更に其の淨土宗に對立した傾向が多いだに、淨土宗よりも後に出來たゞけ、淨土宗にあきたらぬと感じたところを補つた感がある。例へば稱名生因に對して信心生因と云い、臨終往生に對して平生業成と云い皆その類である。

殊に眞宗の全々授戒を無視し、肉食妻帯を以つて之を寺院の生活に公許したが如き、同じ信仰でも之を能化の態度でですして同朋同行の人として民衆に接した如き全く在家佛教への一大展開と云はねばならぬ。(一九三一、四、二七)

# 救いの宗教

土屋 觀道

(一) これでも宗教か

○「本當に佛の救いと云ふものがあるならば信仰に入つた人にはそれだけの救いの効果が現はるべきではないでせうか。」

□「それは云ふまでもないことだと思います。」

○「然に私の見たところでは、さうもそれが現はれてゐないやうに思へてなりません。否それどころか世に宗教家なき云ふ人に本當の宗教家らしい人がなく、又自ら信仰家なき云ふ人に割合に人格者でないことも事實です。尤も一寸遠いところからそれを見ればいかに宗教家のやうであり、信者のやうにも思はれますが段々近づいて之を見れば寧ろ之でも信者かと云いたい人が多いのを見ます。」

□「然しそれは本當の信者ではなくて、誤られたる信者のことではありませんか。」

○「私も初めの程はさうかとも思つて見ました、乍然今日の場合殆ど信者と云ふ信者が皆さうではないかと思はれてならないのです。」

□「然しかう云へば私があなたに反對して、宗教を辯護

するやうでもあります。私も今日の多くの既成宗教に於て多くの僧侶や信徒の中にあなたの云ふやうな意味の人が甚だ多いことを認めます。乍然宗教本來の意味から之を眺め、若しくは昔の多くの宗教的偉人や、宗教の信者には可なりに私共の本當に感心すべき人が多いかと思ふのです。」

○「或はさうかも知れません。乍然それはたゞ多くの宗教信者の中の一、二人にすぎないものであるかも知れんではないでせうか。そして多くの場合、多くの人はやはり今日の多くの人々のやうに、ろくでもない人ばかりが所謂宗教の信者と云ふものではなかつたかと思はれぬこともないかと思ふのです。」

□「そのことも可なりに肯定されることです。そしてまた、私もその点については全く同感な点があります。乍然それは宗教の一種の余弊であつて宗教そのもの、罪でもなければ本當の宗教信者の非難とはなりません。」

○「然し、さう云ふ理窟は暫く別として、今日の宗教信者と云ふものが實際に於て、如來の救いに任つたと云

ふ實際の効果がなるとすればやはり宗教の實際的價值に於ては、案外低いと云はねばならぬではないでせうか。」

□「然し、それはまだ本當の宗教を民衆が理解し得ないが爲めの結果であつて、若し一人でも本當の宗教に目醒めるものがあつて、その爲めにその人が私共の本當の人生を指導するものがあるならばそれこそ本當の宗教として、私共は之を認むべきではないでせうか。それに本當の宗教と云ふものはそんなに外見から一見して之を見別けると云ふことは困難なものであります。何となれば宗教の本質はその人の身心の根底に一大革命を來たすものではありますけれども、必ずしもさう外観から一目して判然するものではないからであります。」

○「それにしても、本當の宗教と云ふものがあるならば其の信仰に入つた人には其の結果として幾分の變化と云ふものはあるべきではないでせうか。」

□「それは云ふまでもないことと思ひます。」

○「然に今日の多くの信者と云ふ人にそれが無いではありませんか。」

□「それはあなたの外から見た一つの考へに過ぎぬではないでせうか。」

○「或はさうかも知れません。乍然私共としては信仰に入らない限りそれより外に仕様がないうでせう。」

□「乍然それはあなたの考へ違いであつて、私の考へでは少くとも私の生活は入信の以前と以後とは全く一變したものであると思へるのであります。尤もそれは單なる私だけの考へである云へば云はれないこともありますまい。乍然私の宗教生活の信念としては全く右の感じに充たされてゐるのであります。そして尙私の考へでは私の此の生活は單に私一人の生活でなくして眞に私のやうな宗教の生活に入る人は皆悉くがかうなつて行くものであると信するものであります。」

## (二) 救いの意味

○「それでは、あなたは神のやうな生活ができるのですか。」

□「それは又何ぞですか。あなたは人が宗教に入ることには神のやうな生活がすぐにできるものだとどの考へですか。」

○「必ずしもさうだとは思いませんが、神のやうな生活に近づくものだと思つて居ります。」

□「神のやうな生活とはどんな生活でせう。先づそのことから承らなくては私は直にあなたの説に賛成すること

とができませぬ。乍然神の生活と云ふことが完全なる人の生活と云ふことなら、私共の宗教生活が神の生活に到らんとするものであると云ふことに異存はありません。乍然それだから、宗教に入るものは直に神のやうな生活ができるとか、又できなければならぬと云ふならばそれはあまりに浄土教の救いを知らぬものと云はねばなりません。浄土教の救いはむしろそれができないやうな人を救ふ点にあります。

○「それでは人類の理想がなくなるではありませんか。私共には本来から佛性があると云ふのですからそれを開發して、佛陀の生活を爲すべきでせう、従つて私共に佛性がある限り、私共に佛陀の生活ができぬと云ふことはないではありませんか。」

□「いや、理窟から云へばそうも云へます。乍然それではあなたにお尋ねいたしますが、あなたには果して佛性があると思へますか。」

○「それは判りませぬ。」

□「たゞ判らないと云はれただけでは相談が進められませんが、それではあなたには人間としての完全な生活を完ふしたいとの御望みはありませんか。」

○「それはあります。」

□「すると、それはあなたの一つの理想と申してもよい

のでせう。」

○「さうです。それは私の一つの理想です。」

□「然し人としての完全な生活がそのまゝ神の生活であり、佛の生活であるならば、私共はさうした意味に於て、神の生活、佛の生活を理想として持ちうるものであると云ふことも云へますね。」

○「無論、云へると思ひます。」

□「然し若し佛教と云ふものが人としての完全なる生活を教ゆるものであり、又さう云ふ生活を求むるものゝ集りであるならばあなたも佛教徒と云ふことができるのではありませんか。」

○「それは云へないことはありません。」

□「然し佛教は正しく人間としての最高完全の生活を理想として常に教へ、又之を眞に求むるの集りでありますから、あなた正しく一種の佛教徒であると云つてよいのであります。」

○「でも、今日の佛教徒が果してそんな完全な生活を求めてゐるではありませんか。」

□「それは本當の佛教徒である限り今日と雖も求めてゐます。」

○「でも、今日の佛教徒にはそれが全くないやうに思へますが。」

□「それは誤まれる佛教徒のことであつて、本當の佛教徒のことではありません。」

○「でも、私共のやうなものは到底佛なきにはなれぬと云つて自らの向上を否定してゐるものもあるではないですか。」

□「それは現在の自己を反省して、全く不完全な自分であると云ふ意味の云ひ方であつて、たゞこのまゝの自分では佛としての生活のできる自分でない」と云ふにすぎませぬ。」

○「でも、それでは自己の佛性を認めないことになるのではありませんか。」

□「そこを救ふのが宗教であります。特に佛教の中でも浄土教に於てそれが著しく如來の救済として現はれて居るのであります。所謂人類の理想と現實との矛盾を救ふところの宗教であります。」

○「矛盾とはどんな矛盾ですか。」

□「それは私共の生活に於ける理想と現實との矛盾であります。即ち理想から云へば私共は完全な生活がしたいものです。謂かへれば佛の生活神の生活が私共の望みであります。然に實際はと見ると、此の世は仲々にさうは行きませぬ。そこに私共の理想も起るのであるが此の理想と現實とは常に矛盾するのが本當でありま

す。而もその矛盾を破つて理想に進まうとするところに

進歩もあり、向上もあり、發展もあります。其の理想は此の世で得られない永生と向上の絶對地であり、而も此の絶對地にあるのが佛陀であり、佛の境地であります。従つて佛の境地は單なる此の世の永生や向上の世界ではなくして、更にそれを超えたるの世界であります。殊に浄土教に於てそれが一層明になるかと思ふのですが、此の人生の矛盾を矛盾なく救はうとして現はれて來たのが阿彌陀佛の信仰であります。」

○「すると、浄土教の救いと云ふものは其の理想が此の世に於て實現のできないものゝ救はるゝ宗教ですか。」

□「言はゞ、罪深きもの、愚かなるものゝ救はるゝ宗教と云つてもよいのです。」

○「然しそれでは道徳と矛盾はしませんか。」

□「決してそんなことはありません。」

○「でも、罪深きもの、愚かなものゝ救はるゝと云ふやうな教は道徳を無視した云い方ではせう。」

□「それは大きな違いです。何も罪深いものを救ひ、愚かなるものを救ふの宗教だからと云つて、罪を造れ、愚人たれと云ふことを勧むるものではないからであります。然し此のことはよく多くの人が誤り勝ちな所のやうです。」

- 「でも、多くの信者はそれを以つて得意とするではありませぬか。」
- 「決して得意とするやうなことはありません。乍然自己の本心が自分の浅ましいところを見出して、それを改むこともできないので、その點を自ら罪深いもの、愚かなものとして深く反省するのに過ぎません。」
- 「然し、いかに反省してもそれを自らに改造しなくては仕やうがないではありませんか。」
- 「ところが、それが出来る位なら、他力教はいらないのです。他力教の他力教たる所以は自分で改造のできることを改造せずして、他力教に任せると云ふのであります。それは己に自分の最善を盡しても、尙それが自分の力では改造ができぬと云ふところにまで行つてゐるのです。」
- 「それで宗教と云へるのでせうか。」
- 「いやそれでこそ本當の宗教と云へるのです。殊にそれが如來の救済と云ふことを深く反省して來るとき、此の意味の救いがなくては眞の宗教とは云へないと思ふのです。而もそれが釋尊を中心とした自力佛敎が彌陀を中心とする他力佛敎となつた所以でもあります。」

## (三) 道德と宗教

- 「然し、それでは道德と宗教が矛盾するではありませぬか。いかに宗教でも道ならない人が救はれると云ふことは一面に道德を無視することになつてよくないことに思ひます。そしてまた、それは如來の正義と云ふこともなくなることになりませう。」

□「然し、宗教の救い云ふことはそれは少し趣きを異にするものがあります。今日でも心から悔い改めたものはたとい過去に於いていかなる罪を犯した人であつても之を許すと云ふことはとがめないではありませんか。而もそれは何故かと云へば己に悔い改めた者は之をとがめるの必要がないからです。して見れば宗教に於ても、己に自らの罪を悔いて、佛に其の救いを求むるのでありますから、佛と雖も之を許すと云ふことが本當でせう。又それでこそ、本當に人も救はれるのであつて、其の點を一層に明にしたのが淨土教であります。」

○「然ば淨土敎に入つた人々はその結果として、其の行いも良くならなければならぬではありませんか。然に多くの人々は悪人正機とか云つて、少しも其の行いを良く仕やうとしないのはどうしたわけでせう。」

□「自分の行いを少しも良くしやうとしないと云ふが如きは全くありません。たゞそれは自分の力で解脱をし

やうと云ふやうな考へはありませんが、一面にはまたそれだけ如來の救いによつて佛とならうとする一念は反つて強いものがあります。淨土敎の特長は自分の力では到底向上のできないので絶望の外ないものを如來の大悲に依つて救はれると云ふことにあります。そして又多くの人々もそれによつて、初めて永遠の望みに生きることが出来るところに一層淨土敎の特長もありません。」

- 「それでは淨土敎に入つた人は少し位は其の行いもよくなるべきではありませんか。」
- 「それは云ふまでもないことです。」
- 「然に多くの信者には其の効果が見えないのは何故でせう。」
- 「それは私共の見る眼がまだ幼稚な爲めか、それともその信者と云ふ人がまだ本當の信仰に入つてゐないが爲めです。」

○「すると、本當の救いと云ふものはやはり道德的にも改善せらるゝものですか。」

□「それは云ふまでもないことです。もともと宗教と云ふものが私共の眞の向上の爲めから出たものであつてそれにそはないうやうな宗教ならばそれは本當の宗教ではないからであります。」

○「すると、此の身このまゝの救いと云ふやうなことはあり得ないことですね。」

□「此の身このまゝ云ふことは自分の力で善人になつてからとか、悪人を止めてからとかさう云ふ自分のはからいをせずとも、その身このまゝを直に如來の大悲に救はるればよいと云ふ意味からでた言葉にすぎません。従つて、此の身このまゝと云ふことは佛に救はれた後も此の身このまゝであると云ふことではないのです。」

○「すると、救はれた後にはさうなるでせう。」

□「それは必ずしも一概には云へませんが、其の人の境遇なり、努力によつて應分の向上なり發展が常に遂げられることと思ひます。」

○「すると、救はれた後にはさうなるでせう。」

□「それは云ふまでもないことです。もともと私共の向上の爲めの宗教であり、人生でありますから、私共の宗教は入信以後こそ一層に大切であると云ふべきです。いはゞ信後の生活であつて佛に救はれたとは如來の大悲に一切を任かせることのできた心境であつて、其の後の生活は常に此の如來大悲の救いの中に一切を任かせて其の中から初めて眞に安住し、而も常に向上

し發展して行けるのであります。

(四) 宗教と生活

□「私共の考へでは人は道徳的にも最も勝れた人生でありたいものだ、そしてまた人は本當にも道徳的にも完全であらねばならぬと思ふのであります。乍然多くの場合、私共の生活は必ずしも現在に於て完全なものではない。従つてそこには可なり私共の理想に於て相反するものが多いかと思ふのであります。而もそれをさうしたならば理想と生活を一致せしむることができませう。本當の生活とは、即ち理想の生活であります。そこで理想を低くして生活に一致せしむるか、それとも生活を高くして理想に一致せしむるか、多くの人は此の中間にあるのであります。乍然人類の進歩は今日の生活にあきたらぬところから、そこに一つの理想を豫想し、之を得やうとするところに、あらゆる努力もあり進歩もあるのであつて、理想を低くして今日の生活に甘んじ得ないのが本當であります。そこで私共の願ひはごこまでも本當の生活を望み、それに向つて精進し努力して、之を達しやうとするのが本心の願ひであります。而も此の本心の自由を得たのが釋尊でありまして、佛教の理想はそこにあります。ところ

が多くの人々は仲々に其の境地に到ることが困難でありまして、其の道に闇く其の實行が出来ないのであります。

○「それは確に困難でありませう。乍然その困難をも切り開いて行くのが本當の人生でありませう。」

□「それは私共も同感です。乍然世にはさう云ふ人ばかりでなく、理想は高くても其の人の境遇なり地位に於て、その實行の出来ない人もあります。又人によつては其の實力のなくして、自らの理想を裏切ることさへあります。さう云ふとき若も佛の救いがなければ人類の前途は全く闇黒であり絶望であります。従つてかゝる時私共が如來の本願に乗じて佛陀の世界に救はれやうするのは眞に生きやうとする者の自然の道行きであります。そしてまた、自ら佛陀の境地に到達し、一切の衆生を自分と等しき自由の生活にまで到らしめやうと云ふ佛の大悲がかゝる絶望の人々を眞に救はうとするのも亦自然なりと云ふべきでせう。而て、行の救はれたいと云ふ衆生の心と救つてやりたいとの佛の心とが一つになつたところに眞の淨土教が現はれて來たのであります。だから眞の淨土教は佛の心と衆生の心とが一つになつたところにあります。言かへれば救つてやりたいとの佛の大悲と佛に救はれたいとの衆生

の心とが相一致したところにあります。前者を如來の大悲と云い本願と云い、後者を衆生の願心と云い念佛心と云ふのであります。こゝに如來の大悲と云ふのは悲智圓滿の如來の大悲であり、絶對の力でありますから、私共の現實の淺聞しさと如來の大悲の宏大さとを聞くにつけ、私共の心は段々と如來の大悲に引つけられて行くのであります。乍然それは仲々困難なことでありますがいつかは如來を離れては生活ができぬ氣分となります。それは恰も太陽を離れては私共の生活が

吾朋便り

□土屋親道 佐屋より

二月三月を棒にふつた私の傳道は四月一日から二十八日まで全く傳道の日送りでした。その爲めに妹は可なり疲れましたが、心のみは衷心から喜びに堪へぬものがあります。恐らく之は自分爲すべき傳道のつさめを幾分でも果したと云ふ心の満足からでもありませうか、その他に懐しき清友のまたなき歡待のまじりに私の心が清められたが爲めでありませう。

□巡回の道すぢは越後の柏崎の三昧會か

あり得ぬやうに如來を離れては私共の生活がないからであります。従つて救ひは即ち生活となります。而もその生活は如來を離れた生活ではないからして、その生活はまた如來を中心として如來の慈光に輝き、如來の理想を我が理想として他にも對するやうな生活となるのであります。それは太陽に照される、萬物の生長の如く、如來を中心とする人類の生長であります。

(一九三二、二二、二六—全三、三〇再校)

ら、大阪、尼ヶ崎、神戸、和歌山、行基寺、名古屋、焼津、静岡の九ヶ所でした。柏崎と行基寺と静岡とが五日と七日五日と云ふ長期の別時三昧會であつた爲めに可なりの新な道友を得たことは近來にない喜びの一つでした。

□中でも和歌山の黒江町と静岡との集りに今度新に開かれた集でありましたが又新に熱心な同志もできたやうで喜んで居ります。行基寺の三昧會は特に多数の集りでもあり割合に古い顔の道友の参加の少かつたにか、わらず若き同志の参加が一層目立つて感ぜられました。志きは朝鮮、神戸、和歌山、大阪、東京、越後から、伊勢、名古屋、豊母、岡崎、焼津、桑名、四日市、揖斐、大垣等からの集り

でした、其の中でも青年の人々に道を求むる人が多く、遊山氣分の人よりも眞剣に道を聞かうと云ふ人が多かつたのは特に私の喜びとするところでありました。□静岡の集りは特に華陽院住職堀田師の發願によるものであるが、同市に於ける粟生、藤井、關の方に並に二三同志の限りない御盡力によつたのでありましたが、志がふえて來たのは非常に嬉しいことではして古來人の集りの難しきものであります。□東京の方では私が二日から佐屋の集りに行くこと云ふので四日の集りを一日に繰り上げました集るもの甘名許りに過ぎませんでしたが之また衷心からの喜びでし

た。それに東京の方でも今度愈々眞生同  
盟東京支部と云ふものを組織して、全國  
眞生同盟の一細胞たらんことを希念して  
居ります。同盟支部の規約書もできまし  
たので若し御希望の方ならば御参考ま  
でに御送り申しても差支へありません。  
□目下私は愛知縣海部郡佐屋の黒宮平八  
氏方の三昧會に三日から來てゐます。集  
る人は二十人許りですが天氣も晴れ渡つ  
た五月の初め、新緑したる此の僻村の地  
は靜に念佛するには此の上ない喜びで  
す。(三一、五、三)

□越後 今井善吉様より  
南無阿彌陀佛

其後は御無沙汰致しました。御上人様  
始皆様に御變りありませんか。今頃は  
行基寺の御念佛三昧で御精進の事を存じ  
ます。

私も其後しつくり御念佛も出來ず、心  
は何んだくソワソワした氣分で居りま  
す、シツクリ御念佛がしたくてなりませ  
ん、一日か二日充分に御念佛の氣分を味  
わつて考へたいと念願して居ります。

折悪しく本年は私が二日感冒、掛り四  
五日たなれ、徳次郎が十二月から盲腸炎  
で時々拾日位三回も寢ましたりして營業

の方が手不足で毎日仕事におはれ色々雜  
務がありまして柏崎の御別時では途々親  
類の結婚披露の爲一日も御隨喜が出來ず  
今でも残念に思つて居ります。

夏の唐澤山丈じは何として御參加致  
したいと今から心掛けて居ります。

何分共今後一層御披露下さいませ。  
人間は念佛する氣分が無かつたら全く何  
の爲めに生きて居るのかわからんと思  
います。然るに近頃の不況では全く營業に  
追はれ私共自身が金の爲めに生きて居る  
のか人生を生甲斐ある生活の爲めに活動

して居るのか自分ながら變に思います。  
不景氣の時程念佛は必要と思ひながらシ  
ツクリ御念佛が出來ません。御念佛の時  
間が無いのではありませんのに如何した  
譯でせう。眞劍に此不況を活動して居る

でせうか。無駄なき生活に生きて居るで  
せうか。私は時々自己を省みてヒヤリと  
感じます。眞劍に念佛にブチ込む事に依  
つて解決ならぬのに私も必ず御念佛に  
一生を過したくないと念願致して居ります。

弟は今温泉に病後を静養致して居ります  
今は手不足の爲め行基寺様は行かれませ  
んが御集りの御方々に御上人より萬々宜  
敷く御芳言の程御願致します。合掌。

大正十四年八月十三日 (大正十四年八月十三日) 昭和六年五月十日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第三種郵便物認可 (昭和六年五月十二日發行)

大正十四年八月

本誌定價  
一 部 金 十 錢 郵 稅 共  
半 年 金 六 十 錢 全  
一 々 年 金 一 圓 全

注 文 の 意  
● 講義希望者は代金を添へて御申込下さい  
● 誌代は總て前金御拂込の事  
● 送金は振替によるのが便利  
です

昭和六年五月十日印刷納本  
昭和六年五月十二日發行

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行兼 編輯人 土屋 觀 道

名古屋市西區隅田町二一番地  
印刷人 百々 治之助

電話西(5)二九三番

名古屋市東區鍋屋町二丁目  
印刷所 福山田活版印刷所  
電話東(4)三二五・三二五

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞生社

振替口座東京四七二八八番